

令和元年度 学校経営報告

東京都立小松川高等学校長 白田 三知 永

1 今年度の取組と自己評価

(1) 教育活動への取組と自己評価

ア 学習指導 達成度B

【自己評価の基準】 A:十分達成できた B:概ね達成できた
C:あまり達成できなかった D:全く達成できなかった

<目標> 「授業で勝負」を合言葉とし、質の高い学習指導に向けての授業改善を推進する。

<方策>

- ① 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善に取り組む。生徒の思考力育成に向けて、考えさせる発問やアウトプット（書く、話す、話し合う、発表する）を積極的に取り入れる。
- ② 課題、補習、小テスト等により基礎・基本の定着を図る。学習課題については内容の精選と教科間での調整を通して、生徒の「やらされ感」を軽減するようにする。
- ③ 教科内での教材の共有化を進め、定期考査の共通化（公民・保健）を完成させる。
- ④ 新学習指導要領で先行実施される「総合的な探究の時間」の理念と指導法を全教員で共有し、PDCAマネジメントサイクルを通して質の高い内容に仕上げていく。
- ⑤ 年2回の「授業見せ合い月間」や生徒による授業評価を活用し、教科ごとに授業改善に取り組む。
- ⑥ 英語の4技能をバランスよく育成するために、CAN-DOリストを中心として、本校英語教育のスタンダードを確立する。
- ⑦ 図書館へ複数配布される新聞紙や総合的な探究（学習）の時間を活用し、主権者教育及び消費者教育を推進する。
- ⑧ 図書館、学年、教科の連携を通して、生徒の読書活動を推進する。

<取組・自己評価>

- ① ほとんどの授業でペア学習やグループ学習を通した話し合いの時間が取り入れられている。また、教室内や学年集会での発表の機会も増加した。調べたことを廊下に展示するなど、成果の見える化も進んだ。
- ② 学年ごとに教科間の課題量の調整を進めた。「学習課題は進路実現に役立つか」の肯定回答が83.3%（昨年度73.7%）であり、課題に対する生徒の意識が大幅に向上した。
- ③ 考査の共通化は国語、地歴公民、数学、理科、英語で100%、保健で90%であり、ほぼ完成した。
- ④ 1年生の「総合的な探究の時間」では、新設した探究部が中心となり「探究入門」「職業探究」「理数探究」「国際理解探究」の教材開発を行った。いずれの内容も質が高く本校のスタンダードとなりつつある。
- ⑤ 「授業見せ合い月間」を活用し、互いの授業を積極的に観察し意見交換が行えた。中には、他教科の授業参観により新たな視点を見つけた教員もいる。
- ⑥ 1、2年はGTECを全員受験し、学年を追うごとに4技能がバランスよく伸びている結果となった。英語検定は校内申し込みを通して、延べ300人以上が受験した。また、CAN-DOリストに基づき、学期毎にスピーキングテストとパフォーマンステストを実施した。1学年が7月にはTOKYOグローバルゲートウェイ（TTGG）で全日研修も行った。
- ⑦ 全国紙6紙を図書館と廊下にそれぞれ配置した。特に、1年地理の授業を通して新聞活用が進んだ。
- ⑧ 国語、現代社会、保健、探究の授業で図書館が活用されている。自習室として図書館を利用する生徒も多い。しかし、書籍の貸出冊数は一日平均10.5冊であった。「学校は生徒の読書活動を支援していますか」への肯定意見も31.4%（昨年度31.1）と低迷しており、今後の課題である。

イ 進路指導 達成度B

<目標> 本校独自の進路指導計画「ウィンズプロジェクト」を核とした進路指導を推進し、塾・予備校に頼らず、ワンランク高い生徒の進路実現につなげる。

<方策>

- ① 大学入学共通テスト、英語外部認定試験、調査書の電子化に向けて、確実な対応を組織的に進めていく。
- ② e-ポートフォリオを効果的に活用するために教員研修を定期的実施する。
- ③ 模試結果データに基づいた資料を活用し、最後まであきらめさせない指導を行う。特に3年生ではケース会議を2回行い、出願指導等に活用する。
- ④ 進路行事への保護者参加や三者面談の実施を通して保護者と連携した進路指導を展開する。
- ⑤ 長期休業期間中の講習について、予備校や塾に頼らないことを前提にして、計画・実施する。
- ⑥ 「何のために学ぶのか」という学習の意義を生徒間で共有させ、家庭学習を一層促す。
- ⑦ 自主学習を支援するため、放課後に自習できる環境（教室・コマホール）を保証する。
- ⑧ オリンピック・パラリンピック教育を実践し、多様性を尊重する態度を育てる。

<取組・自己評価>

- ① 進路通信「時計台」を6回発行し、必要な進路情報を提供した。また、教員向けの「進路部レポート」は8回発行し情報共有に努めた。新入試に向けて、校内では十分な準備ができていたが、急な変更により、混乱が生じた。
- ② 5月にe-ポートフォリオの校内研修会を行い、徐々に活用が広がっている。次年度は校内にWi-Fi環境を整うため、更なる活用が期待できる。

- ③ 3年生ではケース会議を3回実施し、最後まであきらめさせない指導を行った。その結果、国公立大学後期日程での合格につながった。
- ④ PTAと連携した「ウィンズ講座」では保護者を講師としたパネルディスカッションが定着した。「親子の進路講演会」では2割弱の保護者の出席があった。三者面談が十分にできていたとは言えず、一層連携を進める必要がある。
- ⑤ 夏期講習105講座（3年68、2年19、1年18）を実施し、申込者は延べ3,171人であった。2年生対象のウインターセミナーは正月明けに3日間実施し、90名が参加した。
- ⑥ 入学直後のスプリングセミナーで「学ぶ意義」について理解させることができ、学習へのモチベーション向上につながっている。1学年ではClassiを活用し、学習や特別活動の振り返りを記録させている。
- ⑦ コマホール（自習室）を19時まで開室し、自主学習を支援した。1、2年生の活用が進んでいる。
- ⑧ 国際理解探究としてオリンピック・パラリンピック学習を行った。また、生徒会が全校生徒に呼びかけ、千羽鶴でボリビアとチリの国旗を作り上げた。

ウ 生活指導・健康教育 達成度A

<目標> 社会人としての規範意識を身に付けた人間性豊かな生徒の育成を目指す。また、生徒が安心して充実した学校生活を送れるよう学習環境を整備する。

<方策>

- ① 「時を守り、場を清め、礼を尽くす」を指導方針とし、全教員による一致した生活指導を行い、社会人としての規範意識を身に付けさせる。チャイム始業の徹底はこれまで通り継続する。
- ② 時間厳守の基本である登校時間について、予鈴までの登校を徹底し、生徒の遅刻防止につなげる。
- ③ 計画的・継続的な服装・頭髪指導や校外での挨拶励行の指導を継続する。
- ④ 交通ルールの遵守と自転車事故防止に向けた交通安全指導を行う。また、登下校時のマナーやSNSに関するモラルに関する指導も継続していく。
- ⑤ 毎月の教育相談連絡会を活用し、生徒の長欠やいじめを未然防止する。
- ⑥ 誰も自殺に追い込まれることのないよう、SOSを出しやすい環境を作る。
- ⑦ 校内美化活動、ごみの分別、リサイクル活動の充実を図る。
- ⑧ 授業日の登下校時以外は校門を閉鎖し、生徒の安全・安心に努める。

<取組・自己評価>

- ① チャイム始業は当たり前のようにできている。部活動延長時の下校時刻ルールや活動場所の美化が遵守できているとは言えず改善の必要がある。
- ② 生活指導部が毎朝校門に立ち、予鈴までの登校を徹底した。担任との連携により遅刻者が2割減少した。
- ③ 服装や挨拶指導において、教員による温度差が大きい。全教員が同じ目線で行う必要がある。
- ④ 自転車事故が複数回発生し、集会で注意喚起を繰り返した。未然防止に向けて指導を徹底していく必要がある。
- ⑤⑥年間4回の教育相談連絡会で生徒情報の共有を図った。生徒理解をテーマとしたスクールカウンセラーによる教員研修も有意義であった。
- ⑦ ごみ分別等を保健委員の生徒が主体的に呼びかけられるようになった。生徒の意識も高く、分別、リサイクル共に良好である。
- ⑧ 防犯の観点から授業時間帯は校門を閉鎖した。

エ 特別活動・体力向上 達成度A

<目標> 特別活動での取組みを通して、人間として成長させる。

「本物を見る・本物に触れる」ことを通して、知的好奇心を引き出し能動的な学習につなげる。

<方策>

- ① 学校行事全体の活性化を進め、全校生徒の達成感や達成感を高める。
- ② 部活動は学習との両立を基本とし、合理的かつ効率的に実施する。また、地域貢献ボランティア活動「1クラブ一善運動」に取り組む。
- ③ 海外学校間交流推進校として、海外の高校生との交流活動の機会を増やす。また、翌年実施する海外修学旅行に向けて、事前準備を円滑に進める。
- ④ 理数研究校として、校内・校外での本物体験を推奨し、科学の甲子園やコンテスト等へも参加する。
- ⑤ 年4回の避難訓練、宿泊防災体験、生徒による防災支援隊を通して、自助・共助の意識を高める。地域の町会からも積極的に参加していただき、地域との連携をより強化する。
- ⑥ 体育の授業や部活動を通して体力向上を図る。体力テストにおいて、すべての学年で全国平均以上となるようにする。

<取組・自己評価>

- ① 体育祭・文化祭・合唱祭では、新企画や創意工夫により、生徒たちの満足度が向上した。
- ② 昨年度から始めた「1クラブ一善運動」では、21の部活動（昨年度は13）が地域貢献活動を実践した。生徒たちは主体的に参加できており、感謝の言葉も多数届いている。
- ③ 海外学校間交流推進校指定の2年目である。米国の高校生とのSNS交流が高く評価され、ワシントン

D. C. に生徒が招待された。12月には次年度海外修学旅行で交流を予定している学校への実地踏査も終えた。また、12月から2か月間オーストラリアからの短期留学生を受け入れた。

- ④ 理数研究校指定の2年目であり、博物館・民間研究所・理化学研究所などの施設見学、つくばサイエンス研修への参加、校内での科学実験講習会開催など多岐にわたり実施した。また科学の甲子園に「チーム小松川」として参加し、昨年以上の成績を上げることができた。いずれの取り組みも生徒の満足度が高く、意識変容に至っている。
- ⑤ 防災訓練では、ブラインド訓練を取り入れ、教員の役割分担を決めて実施した。生徒の緊張感を高めるためには更なる工夫が必要である。地域防災訓練にはサッカー部とボート部の生徒46名が参加した。
- ⑥ 部活動加入率は95.4%（昨年度93.4%）である。体力テストでは、全ての学年で男女共に東京都平均を上回った。また、1年女子と2年女子は全国平均を超えた。種目別に見ると、東京都平均を下回ったのは、「ハンドボール投げ」（全学年）と「立幅とび」（1年男子と2年男女）だけであった。

令和元年度体力テストの結果

◎：全国平均以上 ○：東京都平均以上

	1年男	2年男	3年男	1年女	2年女	3年女
体力合計点 (昨年度)	52.5 ○ (54.0 ◎)	55.8 ○ (58.7 ◎)	58.9 ○ (57.3 ○)	54.3 ◎ (54.7 ◎)	54.3 ◎ (55.5 ◎)	54.3 ○ (55.1 ◎)

オ 募集・広報活動 達成度B

<目標> 募集・広報活動の工夫・改善により、応募倍率の向上を図る。

<方策>

- ① 本校の魅力を伝えられるよう全教職員体制で学校広報活動に取り組む。
- ② 学校ホームページの内容を見直し、生徒の活躍（学習、行事、部活動等）をタイムリーに学校ホームページに掲載する。
- ③ 新入生・中学生・保護者等のアンケート結果を分析し、効果的で効率的な募集・広報活動に向けて改善を図る。

<取組・自己評価>

- ① 学校案内の配色を寒色から暖色のデザインに変え、明るい雰囲気にした。体験授業や体験部活動の申し込みは161名（昨年度77名）であり、2.1倍に増加した。学校内外での広報活動において、台風による学校説明会中止が響き、来場者総数が8755人（昨年度9297人）と減少した。ただし、校外で実施したブース形式による相談者数は1.3倍に増えた。一般選抜の応募者は1.45倍となり、若干増加した。
- ② 夏の学校見学会では庶務委員の生徒が中学生等を案内し、非常に好評であった。学校の良さを理解していただくために、生徒をもっと前面に出すようにしたい。
- ③ ホームページは「コマメリノート（学校生活の様子）」や部活動を中心に発信した。12月からはリニューアル版のホームページも並行して動かしており、4月には新ホームページに切り替わる予定である。

カ 学校運営・組織体制 達成度B

<目標> PDCAマネジメントサイクルを活用した学校運営を推進する。

<方策>

- ① ライフ・ワーク・バランスの実現に向けて、校務を効率化し、月2回以上の定時退勤を徹底する。部活動指導員・外部指導員の活用、会議時間の短縮、およびICTの有効活用を進め、働き方改革につなげる。
- ② 「チーム小松川」として、協力して新しい時代の学校を創り上げていく職場環境作りを進める。
- ③ 探究部を中心として、学校が直面する課題をとりまとめ、全教員で校内研修を行う。
- ④ すべての分掌・学年・教科が年度当初に組織目標を定め、中間報告、年度末総括を行う。
- ⑤ より良い学習環境に向け、施設・設備の管理・保全と迅速な補修に努める。
- ⑥ 経営企画室において、経営参画ガイドラインを活用して、資質・能力と経営参画意識の向上を図る。

<取組・自己評価>

- ① 部活動指導員を7名（昨年度3名）配置でき、活用が進んだ。超過勤務の教員数は昨年度より減少したが、会議時間の短縮や定時退勤の徹底には至らなかった。
- ② 毎朝のメールでの連絡が効果的に機能している。探究部新設に伴う分掌再編は軌道に乗った。
- ③ 校内研修会を3回実施した。「e-ポートフォリオ」「ランドデザイン」「これからの入試」をテーマにした研修であり、いずれもほとんどの教員が参加し好評だった。その他にも保健関係の研修も実施した。
- ④ 年度当初の組織目標設定、中間報告、年度末総括を通して、課題等を全教員で共有するという流れができている。
- ⑤ トイレの様式化率は90%を超えた。生徒の要望に応え、自動販売機2台を増設し、1台は食品用とした。環境整備面では業務委託との連携が密に行われ、迅速な補修等につながっている。
- ⑥ 行政系職員の意識が高く、学校全体を支える組織になっている。グラウンド・テニスコートの改修工事も順調に進んだ。チャレンジ雇用も定着した。

(2) 重点目標と方策(数値目標)

ア 生徒の学校に対する満足度(学校評価アンケートにおける肯定割合)

項目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
① 学校生活の満足度	90%以上	90.7% (89.0、85.8)	A
② 進路実現に向けての授業の満足度	80%以上	82.6% (78.5、75.3)	A
③ 講習・補習への満足度	90%以上	90.0% (87.4、85.7)	A
④ 三大学校行事に対する満足度	85%以上	87.0% (81.2、75.2)	A

生徒の学校に対する満足度がすべての項目で上昇し目標値を超えた。「この学校に入学してよかった」に対する肯定割合も生徒91%、保護者93%と高い。

イ 生徒の希望進路の実現

項目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
① 国公立大学合格者数(現役のみ)	65名以上	54名(58、73)	C
② 早・慶・上智・理科大合格者数(現役のみ)	80名以上	40名(67、70)	D
③ 学習院・明治・青山・立教・中央・法政大合格者数(現役のみ)	200名以上	161名(264、207)	C
④ 現役進学率	85%以上	90.0%(90.6、85.1)	A

ウ 大学入試センター試験の結果

項目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
① 大学入試センター試験出願率	95%以上	99.4%(99.3、98.8)	A
② 5(6)教科7科目型の受験者	120名以上	117名(105、144)	B
③ 80%以上の得点者が受験者の半数以上の科目	6科目以上	2科目(4、3)	D

エ 授業改善に向けた校内研修の実施

項目	目標値	今年度(昨年度)	達成度
授業に対する校内研修(授業の見せ合い)への参加率	100%	100%(100)	A

オ 応募倍率の向上

項目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
推薦選抜応募倍率(男女平均)	3.0倍	2.52倍(2.70、3.00)	C
学力選抜応募倍率(男女平均)	1.5倍	1.45倍(1.42、1.48)	C

カ 文武両道の実現

項目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
① 家庭学習時間 (学年+1時間)	1学年(2時間以上)	平日72分(73) 休日84分	C
	2学年(3時間以上)	平日94分(103) 休日119分	C
② 勉強と部活動との両立に対する肯定割合	75%	71.0%(69.7、66.7)	B
③ 遅刻者数(学校全体の1日平均)	7人以下	4.71人(5、98、7.60)	A

① 昨年度から集計方法を変更したので、昨年度との比較のみである。数値は1月の結果である。

2 次年度以降の課題と対応策

- ① 学校に対する生徒の満足度が多方面で向上した。今後も生徒への理解を促進し、一層の工夫と努力を重ねていく。一方で、授業の満足度は高まったとはいえ、更なる上を目指すべきである。新学習指導要領の理念を全教員で再確認し、授業改善につなげる。
- ② 今年度の進路結果を分析し、課題を明確にする。進路指導部を中心とした進路指導を通して、より組織的な進路指導を実現する。また、保護者会、三者面談、「親と子の進路講演会」等を活用し、保護者に対して幅広い進路情報の提供を行う。
- ③ 挨拶、身だしなみ、時間厳守等の指導を継続する。特に、部活動延長時の下校時間厳守を徹底する。
- ④ 今年度より始めた体系的な「探究学習」を、来年度初めて実施する「課題研究」につなげる。この「課題研究」を通して生徒の知的好奇心が刺激され、学習意欲の向上や進路選択につながっていくよう、全教員体制で取り組む。
- ⑤ 本校の特色ある教育活動を教職員で共通理解し、より効果的な募集活動を行う。また、リニューアルしたホームページを活用し、こまめに情報発信を行える体制を構築する。